

長野県木島平村発

農村文化体験型修学旅行による新しいツーリズムの 展開

金沢大学地域創造学類 2 年

地域プランニングコース

伊原昂宏

上野亮太

奥田遼介

金原志帆

佐々木絢也

指導教員

神谷 浩夫 人間社会研究域人間科学系 教授

◆はじめに（研究概要）

私たちは長野県の木島平村で昨年の研究で提案させていただいた、「農村文化体験型修学旅行」のプラン作成の要請を村から頂き、プラン作成のために先進地の調査や、昨年同様フィールドワークを行い、研究をおこなった。プラン作成のために、長野県の飯田市での調査や、今年から修学旅行で訪れるという大阪の賢明学院中学高等学校でのヒアリング、村でのフィールドワークを行いニーズの調査や内容の検討、差別化を図ろうと考え研究した。

1. グリーンツーリズムの先進地、飯田市への視察（研究結果要旨）

農村文化体験型という村の独自の生活風土や慣習などを取り入れたグリーンツーリズムのプランを提案するという点で、グリーンツーリズムの先進地域として有名な長野県の飯田市に視察に向かった。

このグリーンツーリズムの企画・宣伝等の運営の活動をしているのが、飯田市観光公社である。ここでは小学生の修学旅行の一環として農作業や地域の人との交流を通した「ホンモノの体験を」というコンセプトでツーリズムを展開している

特にこの「ホンモノの体験」の一つとして取り組んでいるものは「農家民泊」である。多くの修学旅行等で泊まる場所は、旅館やホテル等の宿泊施設である。しかし、飯田での修学旅行では必ず、一泊は見ず知らずのあったこともない農家さんの家に泊めていただく

のである。こうした農家民泊をする狙いとしては、子どものコミュニケーション能力の向上や、自然の中で生活していない都市部の「中学生」に、田舎や地方の「大人」と触れ合う機会を作ることで、農村部での生活や人柄、風習などに触れる、教科書では勉強できない「実体験」を与えるという目的がある。

受け入れ側の体勢としても、農家の件数が 400 軒余りあり、学生を受け入れたいという農家が徐々に増え続けている。一方で旅行生を受け入れたくても受け入れられない待機農家が増え続けている。この理由として、修学旅行を何校も同時に計画・進行していくことは困難であり、一校一校の旅行の質というのも下げたくないというのがある。そのため、学校側の方も数年先まで予約でいっぱいとなっている。

こうした農村の地域住民と都市の子どもが触れ合い、教育の一環としてのグリーンツーリズムで飯田市を筆頭に南信州地域は成功を収めている。

2, 大阪府賢明学院中学高等学校でのニーズ調査

修学旅行や、農村の生活文化体験プランを作る上で私たちは、学校側のニーズというもの調査しプランを検討していこうと、来年度に自然学習で木島平村を訪れるという大阪府の賢明学院中学校の職員の方に聞き取り調査を行った。

今年度から、初めてこうした農村での自然学習をとおした修学旅行に取り組むという中学校では、まず一年時に農村や木島平村の生活や文化について学生たちに調査を行い始めるという。

この時から、もう一方で木島平地域の中学生と文通やパソコンでのメールを通し交流をしていこうと考えている。こうした交流を通して、友達を作っていく、都市と農村の学生が直接自分の住んでいる地域の魅力や問題などを伝えあう中で知識を得る、と考えている。この後、2 年時の 6 月に自然学習に木島平村を訪れる。この際に行う、修学旅行のプランとどんな学習がしたいのかというニーズを聞き取ることができた。

学校側としては、今のところ大きなテーマとして 2 つを掲げている。一つ目に田植えの時期という事で田植えの体験をしたいと考えている。そして、その水田に注がれる水はどういった形で流れてくるのかというのを、村にある水源地である「カヤの平」というブナ林を散策する環境教育を考えている。

2 つ目に、地域の住民と学生が直接関わる機会として、南信州観光公社の行っているような「民家泊」というのを行いたいと考えている。飯田で行われているように、地域の住民と共に料理を作る、食事を囲むなどのコミュニケーションをする中で農村の「人」の心や文化・風土を感じてもらいたいというのが目的である。担当の教員の方がおっしゃるには、都市に住む学生はローカルな視点というのを子どものうちに得る経験がないまま、大人になってしまう学生が多くいるため、そのローカルなところに触れる勉強をしていきたい、

とおっしゃられた。

このヒアリングで感じたことは、都市の学校側のニーズとしては環境教育の一環のスタディーツアーだけでなく、地域の「人」と触れる機会を作り子どものコミュニケーション能力の向上も得ることを目的としたツーリズムを求めているということである。こうした環境・コミュニケーションや地域の文化に触れるような機会を木島平村にも求められているのである。

3、木島平村でのフィールドワーク調査

今年度も、木島平村に入り実際にフィールドワークに入り、村でどのような取り組みができるのか、またそれに関わるような「人」を知るために14日間の現地調査を行った。今回、調査中に千葉県の教育委員会が企画する小学生の「山村留学」があり、その視察と南信州観光公社や賢明学院の求めているような地域の人との交流という点で「民家泊」というものがプランの内容に取り入れることができないかを地元の人に聞き取り調査した。

3、a 千葉市山村留学視察と改善点

村で既に行われている農村体験ツアーとして、8月の20日から24日に千葉市の小学校3校の6年生に募集をかけ対象にした3泊4日の山村留学という「林間学校」が行われているものを視察した。この目的としては、地元の人が実際にそういった体験活動の内容や取り組みを見る中で、取り入れられるような活動をプランに盛り込むこと、またその活動の改善点を見つけるなかで「山村留学」自体の中身の質の向上を図っていくことができると考えた。

今回の視察で主に見たものは、川での魚捕まえ、民宿での農作業体験、野菜を畑から自分で取ってきたのバーベキューの模様を一緒に体験する中で見てきた。この中でも、改善点や良いところ、また自分たちのプログラムを作る上でのヒントは多くあった。

例えば、川での魚捕まえの体験である。これは実際に、100人以上の小学生が捕まえるほどの魚が川にはいないため、村側が魚を流して子どもに取る体験をさせていた。取って焼いて食べるという体験なのだが、実際には子どもが取った後はさばく作業を運営側が行っている。この点は、自分で取ってさばいて食べるというのが「ホンモノ」の体験なのではないかと考えた。子どもがさばきながら、それを食べるころまでやることが本当の「食育」に繋がるように感じた。

またこの魚捕まえの時に、千葉市の小学生と村の小学生が交流する時間がある。地方の学生と都市の学生の交流の大事な時間であるが、一緒に魚を食べるだけという1時間程度しか交流しない。せっかくの機会が上手く行えていないのである。こうした2点の悪いところがこの企画では改善していくべきところだと感じた。

次に、民宿での農業体験である。都会の学生が農作業をする中でその苦労や野菜の知識

を得る、また農家の方と交流する大事な機会でもある。今回、私たちが訪問した場所ではジャガイモの収穫体験と、イチゴの苗植えであった。どちらも、子どもたちがやりやすいようにジャガイモは茎部分が少し残っているだけで抜けばジャガイモがとれる、イチゴは苗を植えやすく耕してあるなど、農家さんによる工夫が見られた。

しかし一方で、子どもが10人程度に対して作業を教える農家さんの人数が一人しかおらず、種類の説明や作業をしている最中は細かく学生に知識を教えられていない状態であった。そういった面で作業を説明するためにももう少し見守る大人の人数が必要に感じた。

魚捕まえにおいても民宿での農作業にしても、改善すべき課題が多くあり受け入れる側としてもっと内容の向上が必要だと感じた。

3,b 「民家泊」における住民の意識

先ほども上で挙げたが、飯田や賢明学院のニーズとしての「民家泊」というもののプランとしての可能性はあるのか、受け入れる住民はどう思うかの聞き取り調査を地区の区長さんに調査した。

聞いた質問は以下の2点である。1つ目に今までにそういった受け入れを行ったことがあるのか。もう一つは、実際に受け入れたいとを感じるか、の2点について聞き取った。

一つ目の質問で区長さんがおっしゃるには今までにも、小学生を自宅に止めるホームステイのような企画はあったそうだが、住民はあまり受け入れず、ほとんどが行政の村の職員が受けいれているという話があった。なぜ受け入れたくないのかと聞いてみるとほとんどの方が「無関係の子どもを預かるのは気が引ける」ということまた面倒を長くは見られないということや、食事を作るのが大変というような考え方をしている。今回、自分たちが考えていた「民家泊」の内容として、学生に受け入れる側がなにかおもてなしをするような形ではなく、自分の子どものようにいつもと同じような食事、対応をしてもらい農村の暮らしや文化を味わってもらえるようなものを考えている。地域の人としては、子どもが来たら、豪華な食事やなんでもしてあげなければいけないのではと考えているようだった。こうした自分たちが考えていることと受け入れ側の思っているような考えのずれというはあるようだった。

こうしたずれを改善すること、地域の人に一回でも実際に体験してもらうことなどのようにすぐにプランを作って実行していくにはとても難しいように感じた。何年もかけてこのプログラムを作っていくのが重要に感じた。

4,プランの作成と報告 （研究によって得られた成果とその活用）

今回の南信州観光公社での先進地視察とヒアリングや学校側でのニーズ調査、木島平村でのフィールドワークを終え、11月にプランの提案と報告等を合わせ木島平村役場で発表した。ここでは、自分たちのプランの詳細と千葉市の山村留学の改善点・受け入れ側のこれからについて発表した。「民家泊」というものの可能性も考えていたが、今回のプランでは来年や再来年に行う事は難しいように感じたというのもあり、2つのパターンで作成し報告する形になった。

◆終わりに

こうした調査やフィールドワークで、やはり受け入れ側の体勢が整っていないと継続してツーリズムの誘致は難しいように感じた。そういった面で、行政が主導で引っ張っていくことも必要だが、地域の住民の意識・やる気というものがしっかりと上がっていかなければ、企画としても倒れるであろうし、旅行内容の質の低下にも繋がっていくように感じた。1年目として、大阪の賢明学院中学校の内容には多くの問題が出てくるように感じている。

そういった面で、昨年取り組んだ「農村文明塾」という地域のコミュニティの受け皿できな公民館活動の重要性というが見えてくるように感じる。今後もそういった受け入れ態勢や地域での取り組みに継続して関わっていくことが重要である。